

三原市と同じ10歳になったよ

合併10周年記念特集
やっぱりみはらが好き
～ We Love MIHARA ～



平成17年3月22日、旧三原市・本郷町・久井町・大和町が合併し、新“三原市”が誕生しました。あれから10年が経ち、今月22日に市は合併10周年を迎えます。

新年度、市は合併10周年記念事業として、4月29日(水・祝)に開催する合併記念式典・伝統芸能披露(※詳しくは広報みはら4月号でお知らせします。)など、さまざまな催しを実施します。

この10年間、「海・山・空 夢ひらくまち」のキャッチフレーズのもと、新たな挑戦を続けてきた三原。市内には三原を愛し、それぞれの分野で頑張っている人がいます。

今月号では合併10周年記念特集として、この10年を振り返りながら、そんな「みはら好き」の皆さんを訪ねました。

☎秘書広報課 ☎0848・67・6007



上の写真で元気いっぱいの姿を見せてくれているのは、三原市と同じく今年度で10歳になった久井小学校の4年生37人です。この子どもたちもこの10年間で多くの事を経験し、たくましく朗らかに成長しました。

平成25年4月、市は市内11校を統合し、新たに3つ

の小学校を開校しました。中でも、久井・八幡地域の小学校を統合して誕生した久井小学校は、久井中学校と同じ敷地内に設置された市初の施設一体型小中連携校。合同体育祭や中学生による体育の実技指導補助など、さまざまな取り組みを行なっています。



市民が本格的な音楽や舞台芸術を鑑賞できる場として、平成19年10月に開館した芸術文化センターポポロ。新幹線の車窓からも間近に見える特徴的なドーム屋根は、市のシンボルにもなっています。春はさつき祭り、冬はイルミネーションでも親しまれ、イタリア語で民衆・



ポポロ・ジュニアスウィング・オーケストラの練習風景

優れた音響は全国有数 すっかり市のシンボルになったドーム屋根

市民を意味する愛称のとおり、市内外から多くの人が集い、にぎわう場所となっています。

世界的に活躍する音楽家や楽団の公演を行う一方で、市民が企画した気軽な演奏会、文化ボランティアの養成講座など、幅広い活動の受け皿となっているのもポポロの特徴です。

平成20年に結成されたポポロ・ジュニアスウィング・オーケストラは、ポポロを拠点に活動する市民によるジャズ楽団。小学生から60代まで30人の団員が所属し、県内を中心に音楽祭などに出演しています。

メンバーの荒谷咲希さんは、学生時代に親しんだテナーサクソを社会人になっても続けたいと入団しました。「子どもたちを大人がサポートし、家族のような温かい雰囲気です」と笑顔で話します。

これからも三原の芸術文化の創造拠点として、ますますの活用が期待されます。



ポポロ・ジュニアスウィング・オーケストラ
あらたにさき
荒谷咲希さん

~~~~~ 行きたいまちへ ~~~~~

三原バイパスの全線開通に合わせ平成24年3月に営業を始めた道の駅「みはら神明の里」。オープンから3年が経つ現在も、週末を中心に車やバイクでたくさんの方が訪れ、三原の新たな名所になっています。

市は、観光客を迎え入れる機能をさらに強化しようと、今月までの週末、観光コンシェルジュ(案内役)を配置し、利用者を市内観光に誘導する取り組みを行なっています。

案内役を務める団体の一つで、歴史愛好家グループの三原二之丸会は、甲ちゅうや羽織、はかま姿で市内の名所や特産品を紹介し、観光パ



混雑時は駐車場待ちが出るほどにぎわう道の駅「みはら神明の里」

市外から人を呼び込む陸の玄関口 総合的な情報発信拠点へ

ンフレットを手渡しています。親子連れなどに頼まれ、記念撮影に応じることも。メンバーは「四国や九州から来る人もいる。市内を通過するのではなく、三原の名所を巡り、名物を味わって帰ってほしい」と呼び掛けます。

みはら神明の里で販売する特産の農水産物や加工品は、より良い商品を提供することで三原ブランドのイメージを高めようと、生産者団体などと協力して商品の改良や改善、新商品の開発なども行なっています。

飲食コーナーでは地産地消をテーマに、地元の食材を生かした料理を提供。単に料理を食べてもらうだけでなく、三原の農水産物のおいしさを広く知ってもらい、消費拡大につなげるねらいもあります。

陸の玄関口として、市外とつながるみはら神明の里の存在感が高まっています。



三原の歴史や文化を愛する
市民グループ みはらにのまるかい
三原二之丸会

明神三丁目のこども発達支援センターのぞみ。ここに通うのは、言葉や運動の発達に心配があったり、友達との関わりが苦手だったりする子どもたちです。月曜日から土曜日まで20人の未就学児が元気に通園しています。

療育に当たるのは、保育士、児童指導員、作業療法士や理学療法士など専門の資格を持ったスタッフ。「一人ひとりの状況に合わせたきめ細かいサポートを心掛けています」と管理者の真田 徹さんは話します。



こども発達支援センター
のぞみ
管理者 真田 徹さん

「一生懸命子育てしているのに、思うように育ってくれない」。最近こんな子育ての悩みを持つ親が増えています。こうした状況に対応するため、市は平成22年10月に子ども発達総合相談室を開設しました。全国でもこうした相談室を単独で開設している自治体

すべての子どもに発達支援を 子と親がともに育つ環境づくり



必要な支援の程度に合わせ、きめ細かい療育が行われています

はあまり例がありません。

相談室には保健師、臨床心理士、言語聴覚士、発達支援相談員が常駐。県立広島大学の専門家や医師、療育機関などとも連携し、発達についての相談に対応しています。必要があれば、のぞみのような児童発達支援事業所への橋渡しも行なっています。

真田さんは「支援が必要な子どもや親のため、行政や大学、事業者がいつでも連絡を取り合えるネットワークがあるのが三原の強み」と言います。「すべての子どもをサポートしていく発達支援」を合言葉に、子と親が安心して過ごすことができる仕組みづくりが進んでいます。

住みたいまちへ

誰もが互いの違いを認め合い、それぞれが意欲に応じて、家庭や職場、地域などあらゆる分野で活躍できる社会ができれば、私たちの暮らしはもっと豊かになるはずです。

市は平成23年10月に男女共同参画推進条例を施行し、男女が等しく活躍できる社会の実現に向けて大きな一歩を踏み出しました。

西宮二丁目で掃除用品の販売・レンタル事業などを営む岩本由美さんは、女性社員が能力や個性を発揮できる職場づくりに力を入れている経営者の一人です。



女性が働きやすい職場づくりを推進する経営者
岩本由美さん

女性社員が全体の9割近くという岩本さんの会社では、家庭用品に関係する部門を女性だけで組織し、女性の持つ細やかな気遣いや柔軟な発想を接客に生かす仕組みを整えています。人材育成にも力を入れ、多くの女性管理職が活躍しています。

個性や能力を発揮し、 すべての人が活躍できるまちへ

「仕事や家事も男女が力を合わせてするもの」という考えを、子どもの頃に身に付けてほしい」との思いから、西小学校児童の社会科見学も受け入れています。

岩本さんは、「女性が働きやすい職場は男性も働きやすい。それぞれの得意分野を生かして力を合わせれば、職場や家庭はもっと良くなる」と話します。

人が触れ合い、ともに参画するまちづくりはゆっくりですが、着実に進んでいます。



事業計画や新商品の情報などを伝える女性だけのミーティング。自由な意見が飛び交います



武道を通じて心身の鍛錬に励む人が集っています

平日の夜、市内の中心部ににわかに活気づく場所があります。掃き清められた床と畳に、吹き抜けの高い天井。館内には竹刀がぶつかる音や畳を打つ音、気合いのこもった掛け声が響き渡ります。円一町二丁目にある武道館です。

市は平成26年4月に武道館を移転新築しました。市内中心部の文教地区、リージョンプラザと南小学校校舎の間にある複合施設は、1・2階が武道館、3・4階が南小学校の体育館として使われています。

武道館はもともと合併直後の平成17年6月まで、宮浦二丁目にありました。しかし、そこに芸術文化センター ポポロが建設されることになり、惜しまれながらも解体。以降、館町二

「道」をともに学び合う仲間たち 心ひとつにつながる

丁目の旧緑ヶ丘女子商業高校の体育館を仮設の武道館として使用していました。

設備が整った真新しい道場には、日々、心身の鍛錬に励む市内の武道家たちが集います。「きれいな場所で柔道の練習ができてうれしい」と、大外刈りが得意という沼田東小4年の坂本瑞季さん。剣道で礼儀正しさが身に付いたという廣大附属三原中1年の丸尾 隆三郎君は、「この武道館で試合に出るときは自分から攻めていきたい」と話します。新しい武道館で道を学び合う人たちのつながりが生まれています。



備後柔道連盟三原支部
さかもとみずき
坂本瑞季さん



三原武道館
まるお りゅうざぶろう
丸尾 隆三郎 君

つながるまちへ

大和町大具で寝具を製造販売する今井宏明さん。会社は複数の大手ネット通販サイトに加盟し、アレルギー対策を施した布団などを販売しています。健康志向の追い風にも乗って、全国から次々に注文が入ります。

転機が訪れたのは平成18年。大和地域に光ファイバーケーブルの高速データ通信網が整備されたことでした。今井さんもすぐに利用を開始。ホームページに多くの写真や動画を掲載し、付加価値の高い商品の魅力を消費者に伝え



高速データ通信網が整備され、地方でも情報格差は感じないといえます

東京に負けないビジネスができる 地方でだって

ることができるようになりました。

事業は最大手の会社から表彰を受けるまでに成長。東京や海外へ出張する機会も増えました。平成23年4月に広島中央フライトロードが開通し、職場から広島空港へさらに短時間で行けるように。「朝、家を出れば、午前中に東京で打ち合わせができる」と地の利を語ります。

陸海空の交通インフラに恵まれた三原市。これに加え、平成23年3月に市内全域で高速データ通信網が近隣市に先駆けて整備されました。



ネット販売で事業を拡大する経営者
いまい ひろあき
今井宏明さん

「三原は通信と交通のインフラがともに整った、都会にも負けない場所」と今井さん。

「この環境に魅力を感じ、起業したいという意欲のある若者が集まるまちになれば」と、若い世代が活躍する三原の未来像も思い描いています。

自分の子どもや孫たちも ずっと三原に住みたいと思っしてほしい

本郷南四丁目の森本征泰さんの自宅は、黒い外観と木目の組み合わせが素敵な、昨年10月に出来たばかりの一戸建て住宅です。「いつも家族の顔が見えるように」と妻の亜有美さんがこだわった、2階とつながる吹き抜けのリビングからは、2歳になる絃葉ちゃんの笑い声が響きます。

森本さんの住む本郷南地区の一部は、市の東本通区画整理事業で生まれた新しいまち。この10年間に市内で最も姿を変えた場所の一つです。



地域内に多くの公園があるのも子育て世代には魅力

広い街路には新しい家が建ち並び、周辺には大きなスーパーや薬局も出来ました。

「三原で家を建てたい」との夢があった森本さんが、本

格的に場所を探し始めたのは3年前。最も重視したのは、生まれてくる絃葉ちゃんが育つ環境でした。

そして、白羽の矢が立ったのが本郷南

地区。「幼稚園や学校があって、電車通学になったら駅も近い」と亜有美さん。図書館など近くに公共施設が多いのも魅力でした。

休日は、乗り物が好きな絃葉ちゃんを連れ、広島空港へ飛行機を見に行くことも。町内会にも入り、「子どもと一緒に、地域の行事に参加したい」と意欲的です。

「気が早いけど、自分の子どもや孫もずっと住んでいたいと思えるような三原になってほしい」。そんなまちが夫婦の理想です。



本郷南の新しいまちで暮らす

ゆきやす
森本征泰さん・
あゆみ いとは
亜有美さん・絃葉ちゃん

思い出の詰まった花火大会を 三原の新しい名物にしたい

山あいに響く音と振動、星降る夜空に開く大輪の華。合併前、旧大和町で開かれていた白竜湖花火大会。「同窓会で集まった友達と思い出を語りながら眺めた」「結婚する前、奥さんと見に行った」。町民にとってふるさとの象徴だった花火大会の開催は、昭和44年から平成16年まで36回を数えました。

4月11日、その花火大会が合併10周年の記念行事として復活します。運営に当たる実行委員会の中でも、行事の企画を担当しているのは、町内の各地区から集まった若者を中心とした企画部会の7人です。

仕事を終えた後に集まり、イベントの内容や当日の進行スケジュールを夜遅くまで話し合っています。「桜と花火が同時に楽しめるの



大会を盛り上げようと話し合いは深夜まで続きます



大和花火大会実行委員会の企画部会

むらかみもとほる からい
前列左から 村上基治さん、唐井 ゆかりさん、
しんはらやすひろ まきしたかずなり たけもとなおや
新原康宏さん、榎下一成さん、竹本直也さん、
もりひろたけし ひがしやまゆき
森廣武志さん、東山田紀さん

は、全国的にも珍しい」と、意気も上がります。

「大和の人には思い出がたくさん詰まった大切な行事の復活。期待に応えたい」。こう口を揃えるメンバーには「三原の新たな名物として続けられれば」との思いもあります。

伝統に若い感覚を加えてよみがえる白竜湖花火大会。桜と花火の競演がどんな景色を見せてくれるのか、期待に胸が膨らみます。



港町一丁目でバル(洋風居酒屋)を経営する
みやほらだいますけ ゆか
宮原大輔さん・由佳さん

います。「のんびりほのぼのとした、三原のまちのような雰囲気のお店にしたかった」。店主の宮原大輔さんは話します。

もともと駅前の飲食店に勤務していた宮原さん。「いつかは自分の店を」という願いを叶え、昨年11月、妻の由佳さんと洋食やワインを提供するバルを開店しました。

当初、尾道や福山への出店も考えましたが、生まれも育ちも三原という宮原さんは「三原が好きだし、できれば地元でやりたかった」

店の灯りが夜のまちにあふれる そんな三原になってほしい

港町一丁目のバル(洋風居酒屋)。木製のテーブルや椅子が並ぶ温かみのある店内では、たくさんのグループが料理やお酒を楽しんで

と言います。出店では市の新規出店支援事業を利用。空き店舗に入居するなど、一定の条件を満たせば改装費や家賃の補助を受けられます。「開店時は何かと物入り。補助を受けることができて助かった」と振り返ります。

「自然も豊かで交通の便もいい。肩肘張らない、ゆったりとした雰囲気」と三原の魅力を語る宮原さんですが、寂しいのは「まちの中心に元気がないこと」だと言います。

「夜、店の灯りがまちにあふれ、たくさんの人が楽しそうに歩いている」。そんなまちが理想という宮原さん。にぎわいを取り戻す一助になればと、今日も2人で厨房に立ちます。



夫婦で力を合わせて店を切り盛りしています



久井町羽倉の農業者
くろだともひろ
黒田智広さん

いを聞くと、まなざしにも力がこもります。アパレル業界に就職し、県外で働いていた黒田さんは「地元で恩返しをしたい」との思いから、三原で農業をする道を選びました。平成25年度に市の新規就農者研修を受講し、昨年4月に農事組合法人の立ち上げに参加。農業者として人生を歩み始めました。

法人では新たな試みとして、野菜の生産も始めました。久井町の粘土質の土壌は、砂質の土に比べて作業が大変な分、栄養が豊富。日当たりが良く、昼夜の寒暖の差が大きな気

三原はまだまだ伸びる 若い僕たちにはチャンスがある

「僕の夢は大きいですよ」。久井町羽倉の農事組合法人で働く黒田智広さん。「三原の野菜を全国で通用するブランドにしたい」。農業にかける思いを聞くと、まなざしにも力がこもります。

候も野菜栽培に適しています。製品の中でも、白ネギは柔らかさと甘みの強さが特徴。市内で販売され、地元産食材として給食でも提供されました。「とにかく愛情を込め、質にこだわっています」と黒田さんは胸を張ります。

本郷町で生まれ育った黒田さん。農業を含め、三原の産業はまだまだ伸びると考えています。「後継者問題や担い手不足は、自分のように新たに挑戦しようとする人にはチャンス。若い仲間がどんどん増えればいい」と期待しています。

三原の野菜が全国の食卓へ届く日を夢見て、黒田さんのチャレンジは続きます。



愛情を込め、丁寧に出荷の準備をします

三原の未来を担う若い力。夢と希望をしっかりと持ち、それぞれの道を懸命に歩んでいます。「ふるさとで生きる」という道を選んだ若者たち

ちがともに語ったのは、やっぱり三原が好きだからという言葉。それぞれの三原愛を胸に、まちづくりの第2章が始まります。

合併10周年

10

~ We Love